

短説

わたあめ

森田カオル

夜もだいぶ更けてきた。賑わいが夕日の残照のように、淡く群青色に染まってゆく。

夜店の裸電球の、眩しく黄色い光の海を離れ、少年と少女は鎮守の森の、人影の疎らなところへと入っていった。

少女は、丸太にラッカーを塗っただけのベンチに腰を掛け、少年を手招きする。

「食べようか」

二人の手にはそれぞれ、夜店で買ったわたあめが携えられていた。

「たっちゃんのを食べたいな」

少年のは、食紅が入っていない、真っ白いものであった。

少年は躊躇いもなく、わたあめの入ったビニール袋を千切った。

ふわふわの物体からは甘い香りが漂った。

「御姉さん、もう戻ってくるんじゃないか？」

「まだまだ。あの二人、きつといちやついて時間忘れてるよ」

少女はそう言って、少年の持っているわたあめにかぶりついた。

少年も、反対側から食べ始めた。

やがて、少女の唇が、少年の唇に触れた。

少女はその唇を吸った。少年も、夢中で吸い始めた。

少女の舌が、少年の舌に触れた。少しだけ、ざらりとした感触だった。少女ははじめられたように身を離すと、無言で少年に自分のわたあめを手渡し、そのまま走り去ってしまった。

少年は暫く呆然としていたが、一人で家路についた。

自分の部屋に、少女からもらった薄いピンクのわたあめを吊るして布団に入った。

翌朝起きると、あんなにふわふわしていたわたあめは見る影もなく、赤い斑ができて縮こまってしまっていた。